重文札幌農学校第2農場農機類標本台帳

一般名称: ヘイフォーク 各種	現地の通称: ヘイホーク

資料種別: ◉製品-実物 ○製品-レプリカ ○製品-模型 ○製品図面 ○写真等 ○図書掲載 ○その他

資料種類: ☒人力用具 ☒手押式 ☐耕耘用 ☐調製用 ☐畜力用具 ☐乗用式 ☐施肥播種 ☐施設類 ☐原動機具 ☐牽引式 ☐管理用 ☐機素 ☐トラクタ具 ☐定置式 ☒収穫用 ☐その他

管理プレートNo.

台帳No.

相手先番号等

配置位置メモ

脱稈室112

製作者・会社:

製造市・国名

製造年_購入年,標本収集年: 農場で利用したフォーク

使用目的・使用方法等

人力用乾草扱い具。畜力モーアは早くに普及したが、その後の乾草反転、集積、ニオ積（大きな山に積み、雨除けカバーを付けて冬季まで貯蔵）、荷馬車への積み込み、馬車から納屋への収納、納屋からの取り出し、牛馬の飼層（餌箱）への投げ込み・・・、麦藁の扱いなど、多様な作業具である。自然木製のホークは装飾品として売られる。人力ヘイフォーク2本爪、3本爪、4本爪、各2台を展示し、タイン本数が多いフォークは、アルファルファ等の比較的重量物に使われた。

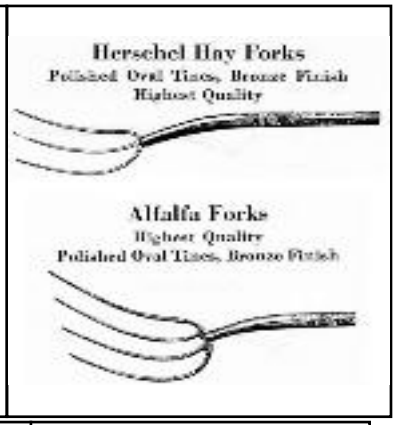
利用経過_収集記録_意義等

たとえ粗飼料生産の畜力機械化が進んでも、納屋や牛舎内の作業が人力に依存しているため、徐々に減ったものの今日でも使われる。 ヘイホークは、乾草を高く差し上げる動作など、柄の長さ一杯を使う作業が多いため、軽量で強固な構造が要求され、単純な構造ながら扱い易くて丈夫な輸入品が好まれる。特に国産タインは、堆肥ホークでも同様ながら、特にヘイホークは、焼入れが強いと折れ、軽度だと曲がり、苦情が絶えなかった。展示品中には、破損したタインが多数含まれる。

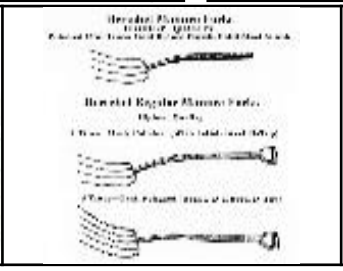
仕様書_解説等

1950年代の講義録は、「ヘイホークは長さ1.8～2.7m、太さ2.5～3.3cmの適度に湾曲した柄の先端に極めて弾力に富む特殊鋼の長さ30～35cmの支杆（細くて強度の強い楕円形のタイン）が幅20～25cmで２～３本あるフォークを言う」とある。なお、堆肥フォークは、D字つかみ付で長さ１m内外、通常支杆４本が付く、さらに根菜用（薯類・甜菜）フォークは、先端に球状物を付けた６～10本の支杆が付くとしている。

右に全体図



外観特色関連図等



資料の所在

収穫調製室

資料管理経過

作業メモ・追記文

台帳管理番号 S713